



卒業記念特集号

巻頭言

「のこの重さで切る」

名寄市立大学図書館
館長 堀川 真



北海道らしい郷土玩具をつくりたくて、木という素材を学ぶために北海道立旭川高等技術専門学院木工科に通っていたことがあります。長い名前の学校ですが、前身は職業訓練校、いわゆる職訓です。就業のための再教育機関という側面があり、通っている間は失業保険を受け続けることができました。なので、机を並べている人たちの年齢も前職もばらばらでした。高卒はもとより SE、支店長、登山家、工場で戦車をつくっていたなど、そんな人たちの話が聞けたのも思い出のひとつです（私の最終学歴でもあります）。

昔々の話ですから先生も家具工場上がりの方でした。いろいろ教わったことのうち、今ものこぎりを使うとき思い出す一言があります。「木はこの重さで切れ」です。はじめはどういうことかわかりませんでした。あんな薄い鉄板で厚い木の板を切るのですから、一生懸命押しつけるように動かして「曲がった」「疲れた」を連発していました。しかし、そのうち言葉の意味がわかってきました。曲がって切れるのも疲れるのも、道具を生かさず無駄に力が入っていたのです。のこぎりを木にあてて、その重さですっと引くと沈むように木が切れる。使い方さえ間違っていれば、時間がかかっても疲れることなく目的は果たされるのです。苦役としてではなく、道具を使う楽しみも生まれました。

子どもとのワークショップでのこぎりを手渡すと、斧のように木にたたきつける場面が見受けられます。そうではない。道具を適切に使える力、それはまごうことなく知と言えるものでしょう。みなさんがこれまで学んだものにかたちはありませんが、それを使えば間違いなく社会を刻むことができる。学んだものの重さで適切に、苦役としてではなく楽しみとして知を使ってください。残された私たちも、私たちのフィールドで仕事をすることにします。いつかどこかでつくり出したものの話を聞かせてください。

推薦図書コーナー ～旅立つ貴方へ贈る一冊～

栄養学科 助教 泉 史郎 先生

『極北にかける』 植村直己著、文藝春秋【当館所蔵有：B297.8/U】

日本人初のエベレスト登頂や世界初の五大陸最高峰登頂を果たした冒険家・植村氏は文才もあり、随筆家としても数々の名作を残しています。本書は氏が南極大陸横断のための「準備」として、寒冷順化や犬ぞりの技術習得のために極北のグリーンランドの原住民の部落に単身入って体験した村人との交流や生活をまとめたエッセイであり、「冒険」とは決して思いつきや行き当たりばつりに行動するのではなく、時間をかけて計画を立て訓練を積み、用意周到に「準備」する緻密さが求められることを伺うことができます。一方で地域住民の協力を得ることが目的を果たすために欠かせないと判断すれば、信頼を得るために海獣の生肉を食べることも辞さない姿勢は、緻密さだけではこれ程の偉業を成し得なかったであろうことを物語っています。

これから新社会人として新天地で暮らす皆さんに是非読んでほしい一冊です。



看護学科 教授 永谷 智恵 先生

『日野原先生からナースに贈る 35 のメッセージ』

日野原重明著、日本看護協会出版会【今後当館に所蔵予定です】

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。いよいよ社会人としてスタートですね。

これからは、看護の専門職者として責任を持った仕事が任せられていきます。でも、新人の皆さんは、きっと悩んだり困ったり様々な壁にあたってしまう事も多いはず。患者さんの看護は「これでいいのかな？学修したこととは違うかも」と疑問が生じたり、個性豊かな医療スタッフとの関係に少し疲れてしまったり、もうどうしていいのかわからなくなった時は、この本をちょっと開いてみてください。きっと、何らかの答えを出してくれる本です。少し元気を取り戻せますよ。



社会福祉学科 講師 小泉 隆文 先生

『農福一体のソーシャルファーム 埼玉福興の取り組みから』

新井利昌著、創森社【当館所蔵有：366.28/A】

卒業おめでとうございます。名寄での4年間はみなさんにとってどのような生活だったでしょうか。名寄市は基幹産業が農業のため、大学の授業でも農業と関係する授業を受講したり、援農ボランティアに参加したり、農家でアルバイトをした人も多かったと思います。

そんなみなさんに紹介したいのが新井利昌『農福一体のソーシャルファーム』です。障害者を中心とした農福連携は全国的にかなり広がっていますが、対象者を高齢者、ひきこもりの人、生活困窮者、触法者まで広げた、今後あるべき農福連携の姿が描かれています。ぜひご一読ください。



図書館長・社会保育学科 教授 堀川 真 先生

『100万回生きたねこ』 佐野洋子作・絵、講談社【当館所蔵有：JE/S】

働くということが、みなさんの身の上にいよいよ起こります。夢も目標もあるでしょう。私もみなさんと同じ年の頃、根拠のない全能感を持って世の中に飛び出し、そして見事に墜落しました。慣れないスーツ姿でため息をつきながら、たまたま書店で手に取ったこの絵本に激しく涙腺をやられました。あのときでなければあれほどの想いは乗らなかったでしょう。生きるとはどういうことか。他愛もない何かの心が響くときがあります。世の中に意味のないことなどないのでしょうか。全てが愛おしく感じられますように。



教養教育部 教授 小古間 甚一 先生

『新装版 日本語の作文技術』 本多勝一著、講談社【当館所蔵有：816/H】

日本語の書き方が学べる最高の一冊。新聞記者だった本多勝一が「読む側にとってわかりやすい文章」の書き方を、事例を示しながら伝授してくれます。

文庫版（朝日文庫）もありますが、内容をよりコンパクトにまとめた「新装版」のほうをお勧めします。

